

BIM連携積算の方向性は？

クラウド対応で使い勝手重視へ

日積サーベイのBIM対応建築積算システム『HEA I O Σ（ヘリオス）』が進化を続けている。今年12月にリリースする最新版のHEA I O Σ2024ではクラウド対応に踏み切る。清水達広代表取締役は「どこからでもアクセスできる作業環境を提供していく。これからも使い勝手を重視した開発に力を注ぐ」と力を込める。BIM連携積算へのニーズが着実に広がりを見せる中、同社が進むべき方向性を聞いた。

そこが聞きたい

販売開始から18年目を迎えたHEA I O Σは、BIM連携積算の実現を目指し、データ連携環境を整えながら進化してきた。2011年に中間ファイルのIFCデータを介した「IFC連携」、16年にはBIMソフトのデータをHEA I O Σのデータ形式に直接変換する「ダイレクト連携」を確立した。

クラウド化についても「データ連携の進展を背景に、ユーザーからの要望が高まっており、1年前から本格的に準備してきた」と説明する。今年12月にリリースするHEA I O Σ2024では従来のクラウド単独で動作するスタンダード運用に加え、新たにクラウド対応を追加する。「より多くの運用形態を取りそろえることで、より多様な

ニーズに 대응していく」。インターネット環境のパフォーマンス低下で作業環境が左右されないように「接続状況に影響されず運用できる手法も検討中」という。

HEA I O Σ2024ではクラウド対応以外にも20項目の新機能を追加予定だ。「円滑な作業ができるように、スピード感を引き上げる機能強化に注力する」。既にシステム基盤は整っており、クラウド対応のように「使い勝手」重視が近年のシステム開発のテーマになっている。現行のHEA I O Σ2023では新



しみず たつひろ
清水 達広氏

日積サーベイ代表取締役

3次元ビューワ機能などを搭載した。

また、22年1月から販売を始めたBIMソフトのアドイン概算システム『COST-CLIP』（コスト・クリップ）も、使い勝手を重視した機能強化を進めている。2月にリリースした最新バージョン2.0も拾い方法（積算手法）の対応を強化し、「全オブジェクト対応」を実現した。これまでは柱や梁などの構造物や意匠材料を計算するための部屋だけを積算対象にしてきたが、雑物や設備用品まで含めて概算コストをはき出せるようにした。構造数量変換も可能にし、構造計算ソフトの算出データも取り込めるようになった。

「BIMで設計しながらリアルタイムに概算コストを把握したい」というニーズは広がりを見せつつある。まだ様子見の設計者も多いが、BIMの進展に合わせ、BIM連携積算の需要は今後一気に拡大していくだろう。23年度から国土交通省が官庁営繕事業

でBIMデータを活用した積算業務を試行することも要因の一つだ。HEA I O Σは国交省が示すBIM連携積算の試行要領や試行対象の部位（躯体、間仕切り下地、外部仕上げ、内部仕上げ）にも対応している。

同社はユーザーの生の声を開発に反映しながら毎年、HEA I O ΣやCOST-CLIPの機能強化を進めている。設計初期段階の概算コスト算出にCOST-CLIP、実施設計段階以降の詳細積算にHEA I O Σを位置付け、BIM連携積算の幅広いニーズを的確にカバーしている。

HEA I O Σではライセンズの保守継続率が9割台をキープしており、ユーザー数も右肩上がりに推移している。清水氏は「時代の流れをしっかりと見据えながら、ユーザーとともに成長していきたい。ユーザー支援の一環としてBIM連携積算の始め方や取り組み方の相談にも積極的に対応していく」と強調する。